

一般演題 (1A2-3)

頭部外傷後遷延性意識障害患者に対する鍼治療—NASVAスコアを指標とした検討—

松本 淳、池亀 由香、野村 悠一、川崎 智弘、西山 紀郎、兼松 由香里、浅野 好孝、篠田 淳

木沢記念病院 中部療護センター

【緒言】 遷延性意識障害患者に対する鍼治療の効果について意識障害スコア (NASVAスコア) を指標として検討した。

【セッティング・対象・デザイン・評価】 当センター入院中に鍼治療を行った頭部外傷後遷延性意識障害患者 21例 (vegetative state[VS] 8例、minimally conscious state [MCS] 13例) の鍼治療期間前後のNASVAスコア合計点を比較した。

これらの患者は、少なくとも鍼開始1ヵ月前から投薬等の治療の変更は行われず、意識レベルを含めた全身状態の変化も認めなかった。

【介入】 週2回4ヵ月間の鍼治療を行った。

治療部位は、水溝、印堂、合谷、足三里を基本穴とした。患者の状態に応じて太溪、風池、百会、太衝等を適宜追加した。

【結果】 NASVAスコア合計点の中央値 (四分位範囲) は、55.0 (50.0、56.5) から52.0 (44.0、56.0) と有意に減少した ($P=0.001$)。

VSとMCSに分けて検討すると、VS群では治療前後に統計学的に有意な変化はみられなかったが、MCS群の中央値 (四分位範囲) は、52.2 (43.0、54.5) から47.0 (41.0、51.0) と有意な減少を認め ($P=0.003$)、スコアの変化量 (減少量) もMCS群が有意に大きかった ($P<0.001$)。

【考察】 NASVAスコアの有意な減少を認めたMCS群においては、鍼治療の併用が有用であったと考えられた。有意な変化がみられなかったVS群については、更に効果的な治療方法の工夫が必要と思われた。